

2017年度 委託研究 ◆研究分野：小学校英語教育／教員現場研修／小学校教員養成

委託研究課題名：小学校英語の授業の充実を図る現場研修の方法を探る

研究者名：久埜 百合（代表者）：中部学院大学学事顧問

新井 謙司：中部学院大学準教授

（元高山市教育委員会学校教育課指導主事）

1. 研究期間：2017年4月1日～2020年3月31日（3年0ヶ月）

2. 研究の目的：

小学校英語の現場で、子どもたちの英語習得を深め、コミュニケーション能力を高めるために、指導技術を向上させて授業の改善を図るには、指導者に対してどのようなサポートが必要か、現場研修の内容の検討、指導者が参加可能な学校現場のスケジュールに合わせた研修計画の立て方などを調査したいと考えた。

また、その研修の結果、授業が改善されることがあれば、授業が変わりうるか、そして、子どもたちの学びに、どのような影響がみられるかを、調査したいと考えた。

調査の方法として、今まで6年にわたり使用してきた“できる度 Check”で、子どもたちの英語に対する距離感を調査し、その結果と英検 Jr. Bronze 級のスコアとの相関をもとに、授業記録を分析して、授業改善の方向と研修の在り方を検討しようとした。

2.1 高山市とその周辺地域を選んだ理由

- ・高山市も白川郷も、ともに国際観光都市として、近年外国からの観光客が急増しているため、今後も外国語を使える人材の育成が望まれており、外国語教育を充実させる必要性について認識が高まっている。
- ・高山市教育委員会としても、英語教育の改善に強い関心があり、ALT との TT だけでなく、学級担任が一人でも授業を展開していける指導力を得るために、研修の必要性を感じている。
- ・高山市は岐阜県内の 1990 年代からの英語教育の動きとは多少異なり、指導方法などについて独自の情報交換が行われてきた。岐阜スタイルの影響はあるとしても、山岳地に広がる東京都に匹敵する面積の高山市に点在している校区での指導技術の選択は、各校区で固定していない印象もあったので、研修方法の検討を行うのに適した条件であると考えた。

2.2 2年後の教科化を前にして考えられた小学校英語の環境整備の必要性

- ・テキストとして Hi, friends! を使用してきたが、2年後には
 - ① 授業開始が早まり、3年生から必修になる
 - ② 5, 6年生で必須教科となり、授業時間が倍増する
 - ③ そのための移行期間として、次年度から使用される新教材が公表されるという状況を予測して、2017年度中に、次年度以降の大きな変革を遅滞なく実行に移せるように、研修その他の方策を通じて、教員の指導技術を向上させようとした。

2.3 研修内容の検討

2017年度末まで必修とされる高学年の外国語（英語）活動が3, 4年生に降ろされ、高学年に外国語（英語）を教科として導入して授業時間も倍増されると、従来の英語指導方法を踏襲するだけでなく、新たな指導内容と指導方法の改変が必要である。

- ① 3, 4年生に、これまで高学年で行われてきた外国語活動を導入するためには、この発達段階に適した指導内容の選択と指導技術が求められる。
- ② 教科として高学年に英語を教えるためには、5年生においては、3, 4年生の2年間にわたる英語活動の経験の上に、週2回相当の指導内容を学習させる必要がある、6年生においては、この3年間の英語学習経験を生かして、中学進学後の英語学習と、

どのように接続させるかも含めた指導技術が求められる。

このような状況は、今まで小学校教育でほとんど経験されてこなかったことなので、増えることが予想される指導内容に対応する指導技術を研修で磨いていけるように、研修の在り方を検討する必要があった。この緊急を要する課題を、高山市教育委員会の構想に合わせて、研修を実施することにした。

3. 研究経過

高山市教育委員会と中部学院大学の協力を得て、2017年度中に実施できたことを、以下に列記する。

- ① 授業支援、推進体制整備支援のための全小学校での英語授業計画訪問、要請訪問
- ② 小中連携の実状把握と授業改善のための全中学校（特に1年生）での英語授業計画訪問
- ③ 校内研修、ワークショップ実施（小学校教職員対象）
- ④ 年間6回の小学校英語研修会（指導方法、教材解釈、ICT活用等 小・中学校教職員対象）
久埜百合（中部学院大学学事顧問）5回、渡辺麻美子（成城学園初等学校）1回
- ⑤ 模擬授業（高山市・下呂市・白川郷において計17回実施）久埜百合
- ⑥ 実践的クラスルーム・イングリッシュ練習会
- ⑦ 推進リーダー育成のためのワークショップ勉強会（希望者）
- ⑧ 小学校英語の情報発信の通信配布
- ⑨ 小学校英語相談ボックスの設置
- ⑩ 年間2回の「できる度 Check（久埜・相田・入江 2011～2013）」ならびに、
その分析と実施校へのフィードバック
- ⑪ 英検 Jr.学校版 Bronze の実施（希望校のみ、4年生～6年生対象）
- ⑫ 中部学院大学主催《教育フォーラム》（講演：松川 禮子（岐阜県教育長）、
コメンテーター：巽 徹（岐阜大学）、山田 誠志（岐阜県教育委員会）、
岡崎 夕佳（高山市立東小学校）
片桐 多恵子・服部 吉彦・新井 謙司・久埜 百合（以上、中部学院大学）

4. 研究報告（報告者：新井謙司）

子どもと英語との距離を縮める要因は何か？

～「できる度 Check」調査で見えてきた子どもの英語学習に対する 意

識の変化と指導者の指導方法の変化～」～

新井 謙司

（中部学院大学）

1. はじめに

本研究においては、岐阜県高山市と白川村の小学校において実施した児童対象の意識調査・英検 Jr. 学校版 Bronze・指導者対象意識調査、そして、授業分析の結果をもとに、指導者のどういった指導方法が子どもの英語力や学習意欲に影響を及ぼすのかについて考察する。その考察をもとに、今後の自治体

や校内での職員研修・指導力向上研修等で取り入れるべき研修方法のポイントについても述べるものである。

2. 調査等の実施方法

2-1 岐阜県高山市の小学校英語支援体制について

高山市では、平成 29 年度より 3 年間、小学校英語支援として「小学校英語総合カリキュラム・マネージャー」を 2 名配置し、市内の小学校からの要請に応じた研修・授業支援等を実施している。2017 年度の活動内容は以下の 10 点である。

- ① 授業支援、推進体制整備支援のための全小学校(19 校)での英語授業計画訪問、要請訪問
- ② 校内研修、ワークショップ実施(小学校教職員対象)
- ③ 小学校英語研修会(指導方法、ICT 活用等;小・中学校教職員対象)全 6 回:
講師:久埜百合(中部学院大学学事顧問)、渡辺麻美子(成城学園初等学校)
- ④ 模擬授業(高山市立東小学校・他 3 校):授業者 久埜百合(中部学院大学学事顧問)(17 回実施)
- ⑤ 実践的クラスルーム・イングリッシュ練習会(希望学校にて)
- ⑥ 推進リーダー育成のためのワークショップ勉強会(希望者)
- ⑦ 小学校英語の情報発信のための通信を配布(毎月発行)
- ⑧ 小学校英語相談ボックスの設置
- ⑨ 年間 2 回の「できる度 Check」(久埜・相田・入江,2011~2013)」の実施・分析・実施校へのフィードバック
- ⑩ 英検 Jr.学校版 Bronze の実施(希望校のみ、4 年生~6 年生対象)

2018 年度に加えられる活動

上記の研修等での学びを土台として、これまでの指導方法を振り返り、担任等の指導者が授業改善に取り組む組織づくりを開始する。そのことにより、子どもの英語の学びがより豊かになることを期待したい。即ち、中部学院大学と組んで、高山市の周辺 5 校・各務原市 1 校と「授業づくり連携協力校」という組織を立ち上げ、現場の英語活動並びに英語科の授業改善に深く関わっていくこととなる。授業観察、学級担任や授業支援者への実質的なサポートなど、日々草の根的に取り組んでいく計画である。

2-2 高山市での小学校英語研修会の実施方法・内容

2017 年度、高山市(小学校 19 校)に対して、年間 6 回の研修を実施した。参加者は、各小学校の英語担当、担任、中学校の兼務職員、中学校英語科等を含むのべ約 160 名(複数回参加者含む)が参加。研修の内容は、すぐに役立つネタ紹介のワークショップ等の体験的な内容から、小学校英語の方向性や次期学習指導要領の内容、各学年における目指す姿や付けたい力、電子黒板の活用法等についての学びを深めてきた。

さらに、久埜百合による年間 17 回の模擬授業(小学校 4 校にて)を設定し、希望者は授業参観をすることができた。また、その後に校内研修会、担任等との事後指導の時間も設定した。また、要請のあった小学校 3 校にて、新井が模擬授業やワークショップ式の校内研修を実施した。

2-3 各調査の実施方法

〈できる度 Check〉

希望学校による小 4~小 6 の児童対象の意識調査「できる度 Check(久埜・相田・入江,2011~2013)」を 6 月末(前期)と 2 月末(後期)の 2 回(2017 年度:1182 名)実施し、それぞれの実施後に調

査を回収し、結果を各実施校へフィードバックした。また、指導者向けのアンケートも同時期に 2 回実施した。

〈英検 Jr.学校版 Bronze〉

久埜百合の英検助成研究として、希望校による英検 Jr.学校版 Bronze を 2 月初旬（後期）（2017 年度：885 名）に実施した。

〈授業分析〉

上記のできる度 Check、英検 Jr.学校版 Bronze の実施、かつ、授業の撮影が可能であった学級の単位時間を対象とした。下記の 8 観点について、それぞれが 45 分間のうち、どの程度の割合をしめていたかについて調べた。

3. 分析結果

3-1 〈児童対象の意識調査「“できる度 Check”」〉

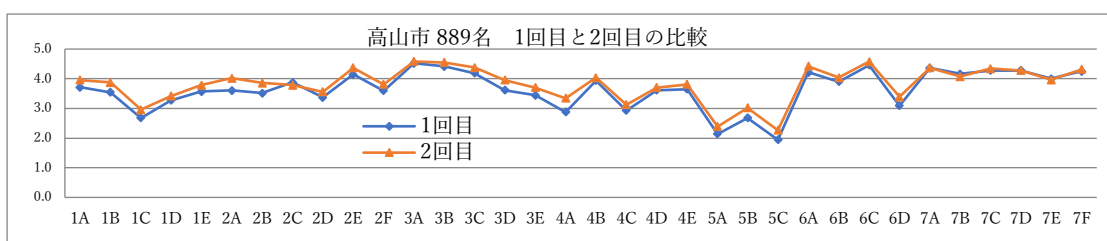


図1

1182 名の回答のうち、回答不備や極端値をのぞいた有効データ（889 名）を対象に分析を行った。項目ごとの t 検定の結果、1 回目と 2 回目の平均の差は、項目 7A・7B・7D・7E 以外はすべて有意差が示された。したがって、1 回目よりも 2 回目の方が、ほとんどの項目において、子どもたちが「できる（自信がある）」と感じている割合が増していると考えられる。また、有意差を示さなかった 7A・7B・7D・7E は、英語への学習意欲や興味関心を問う項目であるが、学習意欲が 1 年間を通じて変わらず高い値を示していることは、学習の充実に伴って、学習意欲も継続的に高く維持されているといえる。これは、今後の授業づくりに多いに励みになる結果である。

3-2 〈指導者対象の意識調査「“できる度 Check”指導者向け事前アンケート」〉

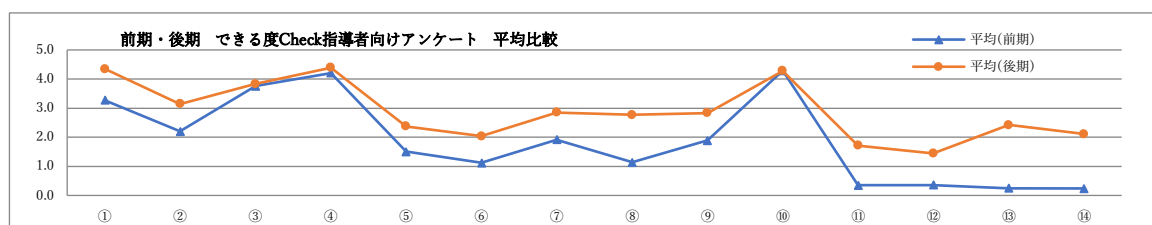


図2

図2のとおり、どの項目においても、1 回目よりも 2 回目の方が、項目間での振れ幅目が緩和されているのがわかる。これは高山市における様々な研修、支援等により、教員の意識改善につながっている可能性があるのではないかと推測する。例えば①「できるだけ英語で授業をし、聞かせる英語は日本語で説明しない」が 2 回目には大きな伸びとなっている。これまで日本語に訳してしまったり、日本語だけで活動の説明をしてきたところを、ALT と英語でモデルを示したり、簡単な英語を使いながら、子ど

もたちを巻き込んで、やり取りしながら理解を促そうとしている兆しではないかと期待したい。また、2020年の次期学習指導要領の完全実施に向けて、いよいよ現場の先生の授業づくりに対する意識が高まりつつあることも要因の1つとして考えられる。

3-3 児童対象の意識調査「“できる度 Check”」2回目と英検 Jr.学校版 Bronze の結果比較

意識調査「“できる度 Check”」の2回目を実施した学校で、かつ、英検 Jr.学校版 Bronze を受験した学校の結果を比較することにした。また、6年生の結果の多くは天井効果を示していると考えられるため、5年生と6年生の一部の英検結果(372名)を使用した。

「“できる度 Check”」では、項目1A~6Dは、子どもの「できる感」を示し、項目7A~7Fは、子どもの「したい感」、つまり英語学習や外国に対する子どもの興味・関心・意欲、動機付けの強さを示す。

	1A-6D	得点
1A-6D(平均)	-	0.446 **
得点(平均)		-

表1

	7A-7F	得点
7A-7F(平均)	-	0.254 **
得点(平均)		

表2

表1と2の通り、子どもの英語に対する「できる感」と英語学習に対する「したい感」のどちらも、英検 Jr.学校版 Bronze の結果と相関がみられることがわかった。久埜・相田・入江(2011~2013)においては、英検 Jr.学校版 Silver の結果との相関関係について報告されている。Bronze では、結果が天井効果になりやすいため、今後 Silver 級以上の結果と比較することにより、より関係性が明確になる可能性がある。

3-4 英検 Jr.学校版 Bronze の結果と授業分析の結果比較

2-3で記載した条件がそろった8学級の授業を分析対象とした。下記の8項目についてそれぞれ時間を計り、単位時間(45分)の中でしめる割合(%)を求めた。

学級	英検	1	2	3	4	5	6	7	8	指導者	内容
A	79.4	2.52	28.33	4.44	3.81	2.22	28.89	0.00	29.78	ALT/HRT/JTE	数字1~20
B	80.0	4.44	4.44	4.44	10.48	20.70	7.41	0.00	48.07	ALT/HRT	数字1~20
C	80.2	5.26	5.44	4.56	17.41	16.59	6.67	0.00	44.07	ALT/HRT	How many ~s?
D	80.5	11.11	11.11	5.11	7.04	11.11	22.22	2.22	30.07	ALT/HRT/JTE	What do you want?
E	81.7	5.48	0.26	11.96	5.93	14.30	23.19	0.00	38.89	ALT/JTE	Do you like ~?
F	82.3	6.67	9.96	3.33	0.00	6.67	13.33	0.00	60.04	ALT/HRT	How many ~s?
G	83.4	1.59	0.00	14.63	12.78	46.33	6.74	0.00	17.93	ALT/HRT	What do you want?
H	91.7	3.44	0.00	3.33	44.00	0.00	22.22	13.11	13.89	ALT/JTE	What do you like?

表3

1. 定型パターン表現(あいさつ等)の時間
2. 歌やチャンツの時間
3. 指導者が英語でモデリングをしている時間
4. 指導者が英語で子どもとやり取りしている時間 Q & A を含む
5. パターン練習、リピートをさせている時間
6. ペア、グループ活動の時間

7. 文字指導の時間

8. 評価、活動の準備、課題提示等 日本語での説明の時間

各項目の関係性から見ると、項目3と項目5は強い関連があり、項目4と項目7は、非常に強い関連が見られた。また、A学級の項目2とG学級の項目5の割合は特徴的である。どの学級でも項目6を多く取り入れている傾向も見られる。英検 Jr.学校版 Bronze 総合点（平均）が1番高かったH学級は、項目4と項目7の時間がしめる割合が他学級よりも極めて大きく、項目8の時間が1番少ない。G学級も同様に項目8の割合は小さいが、その分、項目5にあてる時間が多いことがわかる。さらに、H学級の項目6では他同様に時間を割いているが、項目3・5の割合は小さい。以上のことから、項目4と項目7が英検の結果に何らかの良い影響を与えている可能性があるのではないだろうか。

4 考察・まとめ

本研究は、3年間の継続研究の1年目である。子どもの意識や英検の結果等は、今後の授業改善等によって変化していくものであると考えられるが、今回の研究結果により、教師と子どもの「やり取り」の英語の“量”と“質”、そして、文字指導が、子どもたちの英語学習の「できる感（自信）」や「したい感（意欲）」、そして、英検の結果に何らかの良い影響を与えている可能性があるのではないだろうか。このことをもとに今後の指導者研修の内容を考える時、教材の活用方法、活動の種類、授業の流れ等といったハンズオンの内容を学ぶ研修だけではなく、子どもたちの思考や心を動かす英語での「やり取り」の方法、小学校段階の適切な文字指導について学び、身につける研修内容にしていくことにより、指導者の指導観や指導方法により良い変化が生まれ、やがてそれが子どもたちの学びに良い影響を与えていくことを願っている。

~~~~~

#### 《2018年度研究に向けて》

上記 4. 研究報告（新井謙司）にみるように、1年間の研修・授業実演によって、岐阜県北部地域に今まで伝わっていなかった情報を伝えることができたが、それは種をまいたことを意味しており、今後どのように芽を出して新しい英語教育の改善、さらに充実につながるかは、これからの大きな課題である。すでに2018年度に向けて人事異動も済み、各学校とも Let's Try!と We Can!をテキストに使いながら、授業が始まっている。

前年の研修内容を踏まえて、現場の意識に少しずつ変化が見られ、今後の英語指導について新たな疑問もわき、地域ごとに実験的な試みも始まっている。教育委員会が企画する教員の現場研修に参加するだけでなく、中部学院大学も研究体制を整えて2017年度以上に深くかかわることになった。現時点（2018年5月）で指導を兼ねた学校訪問、教員のサポートの回数も増えている。今年度は、高山市・白川郷以外にもこの研究に加わる市・町が増えて研究対象地域が広くなり、従って参加地域の環境も多少異なるので、その特色も勘案しながら研究を進めていくことになる。

教科となることで、子どもたちの学習の評価に対する注目度も上がっている。2017年度の研究結果を踏まえて、英検 Jr. による評価の有効性についても、さらに研究を深めたいと考えている。

このような研究の機会を与您いただき、多面にわたりサポートしていただいていることを、心から感謝申し上げるとともに、そのサポートを活かして研修及び調査研究に力を注いでいきたい。

（久埜記）